

平成30年度 自己評価計画書

石川県立金沢錦丘高等学校

【重点目標1】 中高一貫教育の特長を生かし、高い進路目標に向かって自発的に取り組むことのできる生徒を育成する。						
具体的取組	主担当	現状	評価の観点	達成度判断基準	判定基準	備考
① 中学校との情報交換や指導記録も適切に踏まえ、学級担任や学年主任等による積極的な面談を行う。	各学年	昨年度、ホーム担任や教科担任との面談によって「より良い変化が生まれた」と答えた生徒は前期67%、後期72%であった。学習に関する悩みよりも学校生活に関する悩みへの対応について、肯定的評価がやや低い。ホーム担任のみならず組織的な対応が求められている。	【満足度指標】 面談を通して、生活や学習に関して、きめ細かく指導を行うことで、学習面での積極性や主体的に進路を選択する姿勢が向上している。	「ホーム担任や教科担任との面談によって、自分の学習姿勢や進路選択に良い変化が生まれた」と思う生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	C、Dの場合、指導のあり方を再検討する。	生徒アンケート（7月・12月）により評価する。
		保護者への情報提供として学年通信や進路だよりを定期的に発行しているが、PTA主催の行事が増えたこともあり、案内が十分でない場合がある。	【成果指標】 学年通信・進路だよりのほかにメール配信も有効に活用し、保護者が目にする機会が増える。	「学年通信や進路だより・行事案内など学校からの情報を見ている」保護者の割合が A 80%以上である B 75%以上である C 70%以上である D 70%未満である	C、Dの場合、取り組みを再検討する。	保護者アンケート（7月・12月）により評価する。
② 学年通信や進路だより等を通して保護者に学校の様子を伝えるとともに、PTA活動や学校行事への参加拡大を図り、家庭との連携を強める。	総務課	昨年度、「中高一貫教育校として、6年間を見通した学習指導や進路指導を行う。」	【成果指標】 行事に参加する保護者の数が増加し、延べで1,000人以上を目指す。	PTA主催の行事に参加する保護者の数が、延べで A 1,000人以上である B 800人以上である C 600人以上である D 600人未満である	C、Dの場合、取り組みを再検討する。	各行事の参加者数を集計し、評価する。
		昨年度、「中高一貫教育校として、6年間を通じた指導方針や指導方法の共通理解と実践に教科で取り組んでいる」と思う教員の割合は前期55%、後期61%であった。6年間を見通した教科指導・進路指導体制の確立に、いっそう努めなければならない。	【努力指標】 6年間を通して、到達目標を明確にし、中高の教員が連携して、生徒の進路目標の実現を図る。	「中高一貫教育校として、6年間を通じた指導方針や指導方法の共通理解と実践に、教科で取り組んでいる」と思う教員の割合が A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である	C、Dの場合、連携のあり方を再検討する。	職員アンケート（7月・12月）により評価する。
③ 中高一貫教育校として6年間を見通した学習指導や進路指導を行う。	教務課	家庭学習時間の目標達成率（H29後期） （平日）全学年51.8% 1年60.5% 2年24.5% 3年70.6% （休日）全学年42.5% 1年35.0% 2年30.0% 3年62.6% 1, 2年生の達成率を上げる必要がある。	【成果指標】 平日は、1年2時間、2年2時間30分、3年4時間。休日は、1、2年4時間、3年総体総文前5時間、総体総文後8時間の家庭学習時間を達成する生徒が増加する。	目標時間を達成している生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	C、Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	生徒アンケート（7月・12月）により評価する。

④ いじめに関する校内研修やスマートフォン等のネットトラブルに関する講習会等を実施し、生徒のトラブルについて予防的対応を推進するとともに、問題行動の早期発見を図る。	生徒指導課	近年深刻さを増すいじめ問題やネットトラブルについて、研修会等を通じて教員が理解を深め、トラブルの早期発見や対応できる体制を確実に作っていく必要がある。	【成果指標】 研修会等により、いじめ問題やネットトラブルの安全対策について理解を深めることで、生徒への指導に結びつけている。	いじめ問題やネットトラブルの予防指導を「実践している」「ほぼ実践している」教員の割合が A 100%である B 90%以上である C 80%以上である D 80%未満である	C、Dの場 合は取り組 みの方法を 再検討す る。	新規 職員アンケ ート（7月・1 2月）により 評価する。
⑤ 生徒一人一人が自発的に挨拶できるような雰囲気醸成し、気持ちよく授業を受けられる環境を整える。	生徒会課	朝の挨拶運動には、35部活動中32部活動が参加し、生徒アンケートによると72%の生徒が積極的に挨拶をしていると回答しているが、「校外からの来校者にも積極的に挨拶している」と回答している割合は28%に留まっている。	【成果指標】 教職員の積極的な声掛けや生徒会や部活動を中心とした挨拶運動により、積極的に挨拶ができる生徒の数が増加する。	「学校生活において、挨拶を積極的に行っている」生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である 「校外からの来校者にも積極的に挨拶している」生徒の割合が A 70%以上である B 50%以上である C 30%以上である D 30%未満である	C、Dの場 合、取り組 みの方法を 再検討す る。	生徒アンケ ート（7月・1 2月）により 評価する。
⑥ 担任、学年、生徒指導室、保健室、相談室、部顧問が十分に情報を共有し、課題や悩みを抱えた生徒を早期に発見し、自発的解決に向けて協力する。	保健・相談課	学業・進路、家庭環境、友人関係などの悩みを抱え、不登校傾向を示す生徒が増加している。また発達障害の傾向があり、集団生活になじめない生徒も増えている。	【成果指標】 早期に連携して、生徒の課題や悩みに対応しようと意識する教員が増加する。	「関係教職員の情報共有により、問題を抱えた生徒を早期に把握し対応している」と思う職員の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	C、Dの場 合、連携の あり方を再 検討する。	職員アンケ ート（7月・1 2月）により 評価する。
⑦ 高校の各年齢段階で求められる知識・教養・感性を身に付け、文章の理解力・表現力を育成するために、読書を奨励する。特に、各教科と連携し、読書指導を授業やシラバスの他、あらゆる機会をとらえて行うことにより推進する。	図書課 各学年 各教科	昨年度、「授業で推薦図書を紹介するなど生徒の読書量を増やすための指導をした」と答えた教員は、全体の39%であった。『先生のお薦めの1冊』の取り組みの効果も少しずつ現れているようである。	【努力指標】 生徒が読書の楽しさを知り、高い教養と感性を身につけ、幅広い考え方ができるように図書の紹介を行い、生徒の読書に対する興味・関心を高める。	「授業やシラバスの他、あらゆる機会をとらえて、生徒に適した書物を紹介し、読書量を増やすための指導をしている」教員の割合が A 50%以上である B 40%以上である C 30%以上である D 30%未満である	C、Dの場 合、取り組 みを再検討 する。	職員アンケ ート（7月・1 2月）により 評価する。

【重点目標2】 各教科・科目における指導を通じて、生徒の、深い思考を伴ったコミュニケーション力の伸長を図る。

	主担当	現 状	評 価 の 観 点	達 成 度 判 断 基 準	判定基準	備 考
① ICTの効果的な活用やアクティブラーニングの手法を取り入れながら授業改善に取り組み、生徒に基礎的・基本的な事項を確実に習得させるとともに、論理的思考力や表現力の育成を図る。また、各教科の特質を踏まえた言語活動を通して、「コミュニケーション力」の育成を図る。	各教科	昨年度後期の職員アンケートによれば、互見授業や錦丘中との交流において、各学期に3回以上「参考になった」と思う教員が39%であり、まだ十分ではない。	【努力指標】 錦丘中とも連携した研究授業や互見授業を通して、授業改善に繋げるために、授業を参観する機会を多く設ける。	「他の教員の授業を参観したり、自分の授業を参観してもらった上で意見を伺ったりして参考になった」と思える回数が、錦丘中との交流を含め、年間4回以上あった」と思う教員の割合が A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である	C、Dの場合、取り組みを再検討する。	職員アンケート（7月・12月）により評価する。
		「ICTをよく活用している」と答えた教員が61%、「時々活用している」と答えた教員は18%、あわせると79%で、一昨年度の77%を上回った。 また、生徒による評価ではICTを利用して学習効果が高まっていると思う生徒の割合は62%であった。	【努力指標・満足度指標】 ICTの「効果的な」活用方法について学校全体で検討し、実践に繋げる。 *「よく活用している」の目安は月2回以上とする。	「授業でICTをよく活用している」教員の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	C、Dの場合取り組みを再検討する。	職員アンケート（7月・12月）により評価する。
		「ICTの活用＝プロジェクトの使用」と捉えるのではなく、タブレット端末を含めた活用内容の向上を追求し、学習効果を高めたい。		「ICTを活用した授業により、学習効果が高まっている」と思う生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	C、Dの場合、取り組みを再検討する。	授業評価（7月・12月）により評価する。
		昨年度の授業評価によれば、授業の中に「論理的思考力や表現力を伸ばす場面がある」という肯定的評価は、前期78%、後期80%であったが、目標には到達していない。	【満足度指標】 思考を揺さぶる学習活動やどんな力を身につけたのかの振り返り（リフレクション）を取り入れ、論理的思考力や判断力、表現力を育てるとともに、自ら課題に向き合うことで、考え抜く探究力を育てる場面が増える。	「授業の中に論理的思考力や表現力を伸ばす場面がある」と思う生徒の割合が A 90%である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	C、Dの場合、取り組みを再検討する。	授業評価（7月・12月）により評価する。
		授業にペアワークやグループ学習などが取り入れられるようになってきているが、他との意見の違いに触れながら、自分の考えや集団の考えを形成・発展させる場面の設定には、工夫が必要である。 昨年の最終生徒評価では、「授業の中で伸ばす場面がある」の項目では、当てはまるが34%、やや当てはまるが39%であった。	【満足度指標】 自らの考えを伝えるだけでなく、集団の考えをまとめられるような指導を取り入れることで、コミュニケーション力を伸ばす場面が増える。	「授業の中に話し合いや発表などを通してコミュニケーション力を伸ばす場面がある」と思う生徒の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	C、Dの場合取り組みを再検討する。	授業評価（7月・12月）により評価する。
② 教科や総合的な学習の時間の内容を関連させ、表現トレーニング、プレゼンテーション、多文化共生理解などに取り組むことで、論理的・批判的に事象をとらえ、自らの考えを述べる力を育成する。	教務課	昨年度、「さまざまな世界的・社会的事象に対して、より関心を持つようになった」と思う生徒は、全体の59%であった。今後は探究活動を本格的に実施することで、興味をもつだけでなく、主体的に調べていく姿勢を求めたい。	【成果指標】 生徒がさまざまな世界的・社会的事象により関心を持ち、それについて意見を持つような生徒が増える。	「さまざまな世界的・社会的事象に対して、より関心を持つようになった」と思う生徒の割合が A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である	C、Dの場合、指導のあり方を再検討する。	生徒アンケート（7月・12月）により評価する。

<p>③ 難関大学や金沢大学を中心とした高い進路志望の実現のため、1ランク上の志望を持たせることにより学習意欲の向上を図るとともに、入試分析や補講・添削等のサポート体制を強化する。</p> <p>※難関大 北海道大、東北大、東京大、名古屋大、京都大、大阪大、九州大、一橋大、東工大、神戸大</p>	<p>進路指導課</p> <p>平成30年度入試では、難関大合格者が京大1名を含めて現役11名となり、4年連続して2桁の合格者数となった。他方、金沢大学の現役合格者数は23名にとどまり、改善に努めなければならない。進路指導課と学年が一体となって、進路実現のためのサポート体制の強化を図る必要がある。</p> <p>※30年度入試結果 難関大合格数 15名（うち現役11名） 金沢大合格数 28名（うち現役23名）</p>	<p>【成果指標】 学力・学習状況の分析に基づくきめ細かな指導を行うことで、難関大現役合格者数が増加する。</p>	<p>東大・京大及び国公立医学科の現役合格者数が A 3名以上である B 2名である C 1名である D 0名である</p> <p>難関大及び金沢大の現役合格者数が A 70名以上である B 50名以上である C 30名以上である D 30名未満である</p>	<p>C、Dの場合、サポート体制を見直し、改善策を検討する。</p>	<p>平成31年3月末の合格者数実績により評価する。</p>
	<p>通常の授業に加え、生活サイクルの中に予習、復習の家庭学習を組み込んで習慣化することで、どの程度学力を伸ばしたのかを図る必要がある。</p>	<p>【成果指標（生徒）】 学習習慣を身につけ、成績を伸ばしている。 *進研模試7月と1月の全国偏差値の比較</p>	<p>今年度で学力を伸ばした1年生の生徒数が A 200名以上である B 180名以上である C 160名以上である D 160名未満である</p> <p>今年度で学力を伸ばした2年生の生徒数が A 160名以上である B 140名以上である C 120名以上である D 120名未満である</p>	<p>C、Dの場合、取り組みを再検討する。</p>	<p>進研模試（7月・1月）により評価する。</p> <p>新規</p>
	<p>昨年度の1月進研記述の3教科全国偏差値60以上の生徒は、 1年生 71名(22.0%) 2年生 71名(20.1%) 昨年度の3年生10月進研記述について、5教科文系全国偏差値56以上と5教科理系全国偏差値54以上の合計人数は93名(30.1%)</p>	<p>【成果指標】 校外模試において、上位者(全国偏差値が1, 2年は60以上、3年は56以上)の数が増加する。</p>	<p>1, 2年生校外模試の3教科偏差値60以上の生徒が A 30%以上である B 25%以上である C 20%以上である D 20%未満である</p> <p>3年10月記述模試で5教科偏差値が文系で56、理系で54以上の現役生徒が A 35%(120人)以上である B 29%(100人)以上である C 23%(80人)以上である D 23%(80人)未満である</p>	<p>C、Dの場合、教科・学年ごとに結果を分析し、改善策を検討する。</p>	<p>模試結果の分析により評価する。</p>
	<p>大学見学や難関大説明会、進路講演会などの取り組みにより、難関大を目指す生徒は増加傾向にある。昨年末の難関大志望者数は1, 2年生とも57名であった。</p>	<p>【成果指標】 1, 2年生で難関大を志望する生徒数が安定している。 東大・京大志望 10名以上 難関大学志望 40名以上 金沢大学志望 180名以上 国公立大学志望 280名以上</p>	<p>1, 2年生で難関大を志望する生徒が A 70名以上である B 60名以上である C 50名以上である D 50名未満である</p>	<p>C、Dの場合、取り組みを再検討する。</p>	<p>進路志望調査（4月・1月）により評価する。</p>

【重点目標3】 多忙化改善に向けた教職員の意識改革を図り、部活動指導の効率化や校内における勤務状況の改善を推し進める。

具体的取組	主担当	現状	評価の観点	達成度判断基準	判定基準	備考
①多忙化の大きな要因となっている部活動において、限られた時間を有効に活用させることによって、生徒の勉学と部活動の両立を図る。	生徒会課	昨年度の部活動加入率（10月） 1年 男子 94% 女子 100% 2年 男子 93% 女子 90% 全体94.8% 勉学と部活動の両立ができていると思う生徒（12月） 1年 61% 2年 58% 全体 59.3%	【成果指標・満足度指標】 学習との両立ができて、心身のバランスがとれたタフな生徒が増える。 あわせて、年間を通して、高い部活動の加入率が維持される	部活動加入率が A 90%以上である B 85%以上である C 80%以上である D 80%未満である 1, 2年生で「勉学と部活動の両立ができている」と思う生徒の割合が A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である	C、Dの場合、取り組みを再検討する。	部登録調査（4月・10月）及び生徒アンケート（7月・12月）により評価する。
②時間外勤務や会議時間の短縮化、効率化に学校が一丸となって取り組み、多忙化改善に向けた教職員の意識改革を行う。	生徒会課 総務課	本校では近年、退校時間（20:00機械警備）が厳守されていなかった実態がある。今年度からは退校時間を19:30とし、残留する必要がある教員については、残留届の提出を求めるなど、業務改善に向けて本格的に取り組み始めた。会議の効率化も含めて、タイムマネジメントに関する教職員の意識は徐々に高まっている。	【成果指標】 業務の効率化やタイムマネジメントに関する意識を強く有する教員が増える。	「業務の効率化やタイムマネジメントに関する意識を高めた」と考える教員の割合が A 100%である B 90%以上である C 80%以上である D 80%未満である	C、Dの場合は取り組みの方法を再検討する。	新規職員アンケート（7月・12月）により評価する。